
サウスポー

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サウスポ―

【Nコード】

N5529G

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

左利き故にピッチャーとなった近藤二三。その彼の野球人生とは。ピッチャーを書いてみました。

第一章

サウスポー

「ああ、御前左利きか」

「はい」

この言葉のやり取りが全てのはじまりだった。

「左利きなら丁度いい」

「丁度いいって？」

「御前ピッチャーな」

リトルリーグに入ったその日にチームの監督にいきなりこう告げられたのだった。

「それでいいな」

「僕がピッチャーですか」

「そうだ」

監督は野球帽を被ったその顔に満面の笑みをたたえて答えたのだった。

「そうだ。まあ今は控えただけだな」

「僕がピッチャーって」

「左だからな」

またここで左が話に出て来た。

「だからだよ」

「僕が左利きだからですか」

「うちは左のピッチャーが欲しかったんだ」

監督は自分のチームの事情についても話した。

「実際のところな。だからな」

「僕がピッチャーですか。それで」

「そうだ。だから頑張れ」

また彼に言ってきた。

「エースになれよ。いいな」

「はあ」

これが近藤一三の全てのはじまりだった。小学二年になってすぐに大好きな野球がしたいから街のリトルリーグに入った。そこでボールを握らせられ言われるままに投げてそれがはじまりだった。実は彼は左利きで何をするにあたっても左手でしていたのだ。

これは母親譲りで子供の頃から特になおされることはなかった。

「まあ今時左だからっていつてもな」

「何にもないから」

これが両親の考えだった。だから昔のようにこれといって利き腕を変えさせられることはなかったのだ。思えばこれには幸運なことであつた。

こうして彼はリトルリーグでピッチャーになることになった。いざ投げてみるとこれがまた監督にもチームメイトの目にも入るものだった。彼は運動神経も中々のものだったのだ。

「おいおい、凄いな」

「あいつ本当に二年かよ」

同じ小学校の先輩達も驚きを隠せなかった。

「動きもいいしな」

「ボールも速いしな」

「これってひよつとしたら」

「凄い奴じゃないのか？」

もう彼に対して期待する言葉が出て来ていた。

「サウスポーだしな」

「ひよつとしたらな」

「監督」

六年の面倒見のいい面々は早速監督に声をかけてきていた。

「あいつ、ひよつとしたら」

「そうだな」

監督ももうそのことはわかっていた。彼等の言葉に静かに頷き応える。

「じっくり育てるぞ」

「じっくりですか」

「まだ二年だ」

まずはその歳を考えていた。

「二年だからな。だからな」

「じっくりとですか」

「あの左腕、ひょっとしたら」

同じ二年生のチームメイト達と一緒にグラウンドを走る一三を見ての言葉だ。今はランニングをしているがそれでも彼の左腕を見ているのだった。

「黄金になるかもな」

「黄金の左腕」

「その為にはじっくりと育てる」

腕を組み確かな声で言った言葉だ。

「じっくりとな。育てるぞ」

こうして監督はその言葉通り一三をゆっくりと、だが確実に育てた。最初はあまり投げさせずに、投げさせても穏やかなキャッチボールばかりでとにかく走らせそして筋力トレーニングばかりやらせた。一三はそのことに文句一つ言わず黙々と従いトレーニングを続けたのだった。

第二章

こうして二年が過ぎた。五年になった彼に監督はある番号を与えた。

「一番ですか」

「頼むぞ」

彼にその背番号を与えたうえでにこりと笑ってみせたのだった。

「この番号はわかるな」

「はい」

一番の背番号が何なのか、最早言うまでもなかった。

「それじゃあ僕が」

「エースだ」

そういうことだった。

「頼んだぞ。マウンドはな」

「わかりました」

こうして彼は正式にエースになった。その左腕から繰り出されるボールは小学生としてはかなりのスピードでしかもコントロールもよく殆どのチームを完封に抑えた。そのあまりもの実力に早速有名になった。六年になった時にはもうスカウトが家にまで来るようになっていた。その人達は口々に言うのだった。

「その左がね」

「是非うちの学校で」

「僕の左ですか」

大人にまで言われて意識しない方がおかしかった。

「僕の左腕が」

「そう、その左をだよ」

「是非うちの学校でね」

「どうかね」

こうした感じで次々に声がかかるのだった。

その言葉を受けて戸惑わない筈がなかった。しかしここで監督は彼に対して言うのだった。

「驕るな」

「驕るな？」

「自分を偉いと思うな」

「こうも一三に言うのだった。」

「いいな」

「偉いと思わないんですか」

「絶対にだ。怪我をしないことも大事だがそれも大事だ」

「自分を偉いと思わない」

「自分でも言う一三だった。」

「それですか」

「御前の左は凄い」

「このことは監督も認めることだった。」

「しかした。それでもだ」

「それを偉いと思わずにですな」

「投げる」

「今度はこう告げた。」

「いいな。投げる」

「投げるんですか」

「怪我をせずにだ」

怪我についても注意することも忘れない。何処までも一三のことを思っているのがわかる。彼は本当に彼を大事に思っているからだ。

「投げ続けるんだ」

「わかりました。それじゃあ」

「中学はまずは御前の行きたいところに行け」

「行きたいところにですか」

「高校もだ」

「高校についてもだった。」

「御前なら何処にでも行ける」

「僕は何処にでも」

「そして勝てる」

勝利についても信賴していた。何処までも一二の素養を高く買っていたからだ。

「御前の左でな」

「じゃあ僕は」

実は彼は中学は地元の中学に行きたいと思っていたのだ。そしてその野球部に入るつもりだった。高校のことはまだ考えてはいなかったがとりあえず中学はそのつもりだった。

「自分の行きたい中学に行きます」

「そうしたらいい。そしてそこで野球をやれ」

「はい」

「そこに道がある」

今度は道という言葉を出してみせた。

「御前の道がな」

「じゃあ僕このまま道を歩いていきます」

一二は監督のその言葉を聞いて述べるのだった。

第三章

「この左腕で」

「そして投げる」

今度の言葉は穏やかなものであった。

「ずっとな」

「はい、そうします」

こうして彼は地元の公立中学に入った。その中学校の野球部に入りそこでもその左腕で相手チームをねじ伏せていった。変化球はカーブをたまに投げる程度だったがそれでもその速球とコントロールで相手チームを寄せ付けず自分の学校を栄冠に導いたのだった。

中学の三年間は練習と試合に明け暮れた。そして高校に進学する時になってまた彼のところにスカウトが集まって来た。言われることは三年前と同じだった。

だが彼は三年前とは違っていた。あの監督の言葉通り傲慢ではなかったがそれでも自分の考えを持つようにはなっていた。その彼が選んだのはここでも地元の公立高校だった。

しかしそこは普通の公立ではなかった。それこそ何十回も甲子園に出場し選抜優勝経験もある名門であった。彼が選んだのはそこだった。

「公立か！？今回も」

「何でまた。確かに名門だけれど」

「それでも。私立の方が待遇がいいのに」

「お金じゃないんだ」

彼はこう考えていたのだった。

「お金じゃないんだ、僕は」

「じゃあ何なのかしら」

母がここでその彼に尋ねるのだった。

「お金じゃなかったら」

「楽しく野球がやりたいんだ」

これが彼の考えだった。

「この左腕でね」

「その左でなのね」

「うん」

その自分の左腕を見ながら母の言葉に答えるのだった。

「野球をね。楽しくやりたいんだ」

「だからあの学校に入るの」

「確かに私立の方が待遇はいいよ」

私立の特徴であった。一芸に秀でているとそれが優遇される。これはどうしてもあるものである。

「けれどね。僕は」

「あの学校で野球がしたいのね」

「駄目かな」

ここで母に対して尋ねるのだった。

「それって。やっぱり」

「いえ、いいわ」

だが母は優しい声で息子のその考えを受けて言っただった。

「それでね。いいわ」

「そう。いいんだ」

「楽しく野球がやりたいのよね」

「そうなんだ」

「その左腕で」

見れば母も彼の左腕を見ていた。自分と同じ利き腕になっているその左腕を。

「やりたいのね」

「ずっとね」

「じゃあ。そうしなさい」

やはり我が子の考えを受け入れていた。

「あんたが望むようにね」

「そうさせてもらつよ。僕はやるよ」

「やりなさい」

ここでも我が子の考えを受け入れていた。

「あんたが望むようにね」

「怪我はしないよ」

このことは細心の注意を払っているのだった。この時も。

「そして偉いとも思わないよ」

「ただ。野球をしていくのね」

「うん」

素直な声で母の言葉に頷く。

「ずっとね」

「そうしなさい」

息子の考えを穏やかに受け止め続けていた。

「あんたのその考えは。間違っていないから」

「じゃあこのままずっと」

「その左腕でね」

「投げていくよ」

一三はずつと自分の左腕を見ていた。今自分の全てを進めさせているその左腕を。

「これからもね」

「頑張りなさい」

我が子に温かい声をかけた。

「その左腕でね」

「うん」

こうして彼はその高校に入ることになった。彼はそこでもピッチャーになりエースになった。そうしてその左腕で勝ち進み夢の一つにあと一步の場所にまでやって来た。

第四章

一年の秋の予選だった。春の選抜の予選で彼はまだ一年だがエースに選ばれ好投を続けていた。そして秋の県大会で決勝にまで至ったのだった。

「ここで勝てば」

「甲子園は間違いない」

誰もがそう思っていた。確かにここで勝てば地域大会にも出場できる。甲子園までの距離が大きく狭まる試合なのは確かであった。

「勝てるか？」

「勝てよ」

誰もがマウンドに立つ一三を見ていた。

「この試合で勝てば本当に」

「甲子園だからな」

マウンドに立つ一三もこのことはよくわかっていた。彼はマウンドに立ちながら後ろを振り返った。そこにはスコアボードがあった。今は二点差だった。彼の学校が勝っている。彼は八回まで相手チームを無失点に抑え遂に九回にまで来たのである。ラストイニングに。

この回を抑えれば優勝だった。つまり最後の関門であった。

あと三人。だがここで彼は。突如としてその自慢のコントロールを乱してしまった。

フォアボールを二つ出してしまった。無死一、二塁。ホームランが出ればそれで終わりという苦しい状況を自分から作ってしまったのだった。

「おいおい、ここがかよ」

「ランナー二人か」

彼の高校の面々はこの事態に顔を曇らさざるを得なかった。

「ここで一発出たらな」

「終わりだな」

「ああ」

このことは彼等もよくわかっていたのだった。

「まさかとは思うけれどな」

「近藤に限ってな」

「いや、わからんぞ」

楽観論と悲観論が交錯していた。

「物事には絶対はないしな。しかも」

「しかも？」

「向こうは一発のあるのが三人続くんぞ」

その最も怖い力のあるバッターが続くのだった。しかもアウトを取らなければならぬ数だけである。

「だからな。ここは」

「まずいか」

「覚悟はしておくことだな」

こう言われるのだった。

「何があってもな」

「祈るか」

こうした言葉まで出された。

「あいつが抑えるようにな」

「そうするか」

こんな話までやり取りされるような危機的な状況だった。だがマウンドにいる一三自身は至って冷静だった。一年先輩であるキャッチャーの田所雄三が心配する顔でマウンドに来ても落ち着いた表情をしていた。

「安心して下さい」

「いけるのか？」

「かえって落ち着きました」

こう言う程だった。

「フォアボール二つ出して」

「それでか」

「ええ、かえって」

また言うのであった。

「落ち着きました」

「じゃあいけるか？」

「いけます」

はつきりとした顔で答えたのだった。

「やらせて下さい」

「わかった。そこまで言うのだったらな」

田所も彼のその言葉を受けて納得した顔で頷いた。

「監督にも俺から言っておくな」

「御願います」

「あと三人か」

ここで田所は言った。彼から見て正面にあるそのスコアボードを見つつ。

「三人だな」

「それで甲子園ですね」

「ああ、そうだ」

県大会で優勝すれば流石にだった。春の選抜はこうしたところは今一つ曖昧なところがあるがそれでも大きいことは間違いがなかった。

「甲子園のマウンドに立ちたいな」

「はい」

田所の言葉にこくりと頷いた。

「やっぱり。それは」

「甲子園に行きたくない奴なんていないさ」

これは高校球児なら誰でもであった。まさに甲子園は彼等にとっては憧れの地なのだ。これは高校野球ができた時から変わることはない。

「俺も御前もな」

「はい。ですから」

「抑えろ」

田所は二三の心を受けていた。

「あと三人。いいな」

「わかりました」

こうして彼は引き続き投げることになった。あと三人。この三人を何があっても抑える為に。

まずは一人。カーブとストレートを効果的に使って三振に抑えた。この時はとりわけカーブが効いた。

「これでまずは一人だな」

「あと二人か」

グラウンドも観客席もこのことでとりあえずは安心した。あくまで彼の高校側は、であるが。

第五章

「けれど次はな」

「一番力の強い奴なんだろう？」

「ああ」

一難去ってまた一難というわけだった。ピンチは続いていた。

「あの高校の主砲さ」

「主砲か」

「抑えられたらいいんだけどな」

皆また不安な顔になるのだった。そのバッターがバッターボックスに入るのを観ながら。

ところがであった。ここで誰かが言った。

「大丈夫だよ」

「大丈夫！？」

「ああ、安心していい」

その彼はこう言うのだった。

「あのバッターにはな」

「何でなんだ？」

「左だからだよ」

彼は言った。

「あのバッターが左だからだよ」

「それがか」

「左対左だ」

一三が左だから必然的にそうなる話だった。

「だったらな」

「勝てるっていうのか」

「左対左は」

その彼はさらに言葉を続ける。

「ピッチャーの方が有利になるんだよ、大抵はな」

「大抵？」

「何でだよ」

「左から投げるだろ？ だったら左のバッターボックスからはボールが見えにくいんだよ」

視覚的な問題だった。

「それに右ピッチャーの方が多いだろ」

次に言う問題はこれだった。

「だから。左ピッチャーには馴れていないからな」

「だからか」

「右バッターならまた違うけれどな」

ただ単に右と左ということではないのだ。そこには大きな違いがあるのだった。

「だからな。ここは」

「近藤に有利か」

「それにあいつは左バッターに特に強い」

今度は一三自身の特性だった。

「だからな。絶対にいける」

「よし、じゃあここは」

「あいつに任せるか」

「信じる」

こうまで言う者が出た。

「あいつをな。それじゃあな」

「見せてもらうか」

ここでは彼等は腰を据えて見ることにした。こうして一三とそのバッターの勝負がはじまった。まずは彼はストレートを投げた。

それはバッターの内角低めギリギリに入った。バッターは身動き一つできない。その判定は。

「ストライク！」

「よし！」

「まず一球！」

一三の高校側から歓声が起こった。

「いいコースに入ったな」

「ああ、相手は手も足も出なかったな」

「いけるか？やっぱり」

その左対左ということがそれぞれの脳裏に浮かんだった。

「ここは」

「抑えられるか」

「いや、あと二球」

ここで楽観論を戒める言葉が出された。

「あと二球ある。だから」

「これからか」

「ああ。あと二球」

またこのことが言われたのだった。

「まだどうなるかわからないからな」

「しかしな」

「しかし？」

「やれる」

それでも一三を信頼していたのだった。誰もが。

「今のあいつならな」

「あのバッター、抑えられるか」

「まずな。だからここはな」

「見るか」

「ああ、見守ろう」

ここでもこうした結論になった。

「この勝負な」

「そうするか」

こうして彼等はなおも腰を据えて勝負を見守るのだった。一三はセットポジションから二球目に入った。今度は縦に大きく割れる力一ブをバッターの背の方から内角に入れた。これまたかなりきわどいコースだった。今度の判定は。

「ストライク！」

「よし！」

「また入ったな！」

また歓声が起こった。これでツーストライクになった。

第六章

「きわどいコースだったけれどな」

「入ったな」

「これであと一球だ」

今のカーブが入ったことはやはり大きかった。これも一三のコントロールの故だった。

「あと一球。これで決まるけれどな」

「どうなる？」

それでも緊張は解けない。まだ勝負は決まったわけではないのだ。

「次の一球」

「ストライクか？それとも」

言っている間に一三はまた投球フォームに入った。今度投げたのは。

スライダーだった。だが曲がりには先程の縦のカーブに比べて弱い。手元で曲がる感じだった。

それはバッターから見て外角に入る。バッターはストレートが来ると思っていたのか動きが泳いだ。そうしてバランスを崩しつつもバットを振るがそれは。

空振りだった。空しくバットを振りそのまま倒れる。誰がどう見てもその結果は一つしかなかった。

「ストライイクバッタアーウーウト！」

三振だった。一三の勝ちだった。彼は変化球を使って相手バッターを見事三振に打ち取ったのであった。彼の見事な勝利と言えた。

「よし、やった！」

「あと一人だ！」

「あと一人で勝てる」

これでツーアウトだった。観客席もベンチもさらに沸き立つ。
「あと一つだ」

「あと一つで」

どうしても興奮が高まる状況だった。

「甲子園だ」

「ああ、甲子園だ」

そのことに胸を高まらせるのだった。

「あと一つで」

「あとワンアウトで」

「甲子園だ」

どうしてもこのことを意識する。

「いける、いけるぞ」

「あと一つで」

ナインもここでマウンドに向かう。そうして一二に対して言うのだった。

「あと一つだ」

「頼むぞ」

「はい」

一二も彼等の言葉に対して静かに頷くのだった。その顔は緊張しているが冷静だった。

「あと一つですね」

「ああ。しかしな」

「次のバッターは」

ナインは田所を中心として今はネクストバッターボックスにいるそのバッターを見るのだった。

「あいつには打たれてるからな」

「三安打か」

一二が一番打たれているバッターだった。

「しかもあいつも長打力があるからな」

「下手をすればな」

「ええ、わかってます」

一二はナインの言葉に対して静かに頷いた。

「抑えなければ。下手をすれば」

「あいつから反撃がはじまるか」

「あいつで終わりだ」

そういうことだった。

「あいつを抑えればそれで終わりだ」

この場合は彼等の勝利である。

「打たれればそれはそれで終わりだ」

この場合は彼等の敗戦である。

「どちらにしろな」

「だから近藤」

「どっちにしろ最後だ」

ナインはそれぞれ真剣な顔で彼に声をかける。

「わかったな。後は御前に任せるからな」

「頼むぞ」

「わかりました」

返事は確かなものだった。

「じゃあ。あと一人」

「ああ」

「抑えてみせます。それで甲子園に行きましょう」

「飛んできたボールは俺達があつても取るからな」

「後ろは任せろ」

彼等もそれぞれの仕事はわかっていた。打たれればそのボールを何があつても受けてアウトにする、やはり野球は一人ではなく全員でするものだからだ。

「いいな、後ろはな」

「任せてくれ」

「有り難うございます」

この言葉だけで今の彼には充分だった。

「それじゃあ。投げます」

「よしっ」

「任せた」

ナインは彼の言葉に頷いて今はマウンドを後にした。そうしてそれぞれのポジションにつく。今遂に最後の一人との勝負がはじまるうとしていた。

相変わらずのセットポジションだった。やはりランナーを背負っている以上この動作から投げることは外すことができなかった。まずは一球。外角へのストレート。しかしこれは外してしまった。

「ボール！」

「くっ！」

「外したのかよ！」

「いや、違う」

ここでまた誰かが言った。

「あれは振らせるボールだった」

「振らせるボールかよ」

「きわどいコースだった」

外角低めギリギリだった。あとボール半個程度だったのだ。

「あれは審判がストライクと言っても不思議じゃなかった」

「けれどボールか」

「よく見てるな」

「ああ、あのバッターはな」

ここで右のバッターボックスに立つそのバッターが見られた。見れば彼はバッターボックスの中で実に涼しい顔をして構えている。

第七章

「ボールをよく見ているな」

「そういえば近藤からも」

「三安打」

このことが観客席においても語られる。

「しかも一本はツーベースだしな」

「相性もいいのか」

「あいつにとつては一番嫌な相手だ」

このことも語られた。

「間違いなくな」

「最後の最後でそんな奴が出て来るなんてな」

「嫌な展開だな」

「下手すれば本当に逆転か!？」

ホームランが出れば間違いなくそうなる展開なのは変わっていない。

「ここは。間違いなく」

「やっぱりまずいな」

「抑えられるか？」

今までで一番不安になる彼等であつた。

「今度ばかりは駄目か？」

「どうなるんだよ、本当に」

そんな声の中彼は二球目を投げた。今度は内角低めのストレートだったがそれはバットに当たりボールは後ろに飛んだのだった。

「よし、まずは一球だな」

「いけるか？」

「芯に当たった」

しかしここでも言われた。

「今のは。当たった」

「当たってるか？」

「後ろに飛んだ」

そしてボールはバックネットに当たった。これ自体はよくあることだ。

「それは芯に当たった証拠だ」

「じゃあやつぱり近藤のボールは」

「あいつには駄目なのか？」

「だったらよ」

「本当にまずいかもな」

危惧する声がまた出された。

「これはな」

「うつ……」

「辛いな」

見ている方もこう思うようになってしまつ展開だった。

「これであと二球もか」

「打ち取れればいいんだけどな」

「いや、打たれたらまずい」

打たせて取ることはここでは危険視された。

「余計にな。三安打も打たれているんだ」

「だからか」

「それも駄目か」

「三振に取るしかない」

今はそれしかないのだった。

「ここはな」

「おい、頼むぞ」

「あと二球だからな」

彼等も祈るばかりだった。今はこれしかなかったしできなかった。マウンドにいない彼等にとってはまことに心細いことだった。その中で一三は三球目を投げた。

今度はカーブだった。内角に入る。しかしこれは内角でボールに

なってしまった。

「ボール！」

「ワンツーか」

「バッター有利だな」

俗にバッター有利とされるカウントである。

「フォアボールになったら余計まずいよな」

「ここで満塁は最悪だろ？」

「だよな」

だからこれは余計にまずいと結論付けられたのだった。

「じゃああと二球か、やつぱり」

「やるしかないか」

結局はこうなるのだった。

「本当に頼むぜ、近藤」

「御前しかいないんだからな」

祈りの言葉は続けられる。その中で投げた四球目、今度はストリートが外角高めに入る。今度もまたボールはバックネットにぶつかったのだった。

「やつぱり芯かよ」

「捉えられてるな」

「間違いない」

二球目もだった。最早疑う余地はなかった。

第八章

「それにボールもよく見てるしな」

「選球眼いいな」

彼等にとつては嫌なことである。

「これは下手なところ投げてても」

「見送られてボールになる」

「それでストライクを投げてても」

「打たれる」

どちらにしろ非常にまずいことには変わりがなかった。

「どうすればいいんだ？」

「あと一球」

「あと一球なのにな」

「その一球がなあ」

「ああ」

言葉は溜息になっていた。

「果てしないっていうかな」

「いつもの近藤だったらあつという間なのにな」

「そうだよ、あつという間」

一二の実力からすればこれは当然だった。いつもどんな強打者も次々に三振に取ってみせる。だからこそ頼りにされているのだ。しかし今回ばかりは違っていた。

「けれどな。それがな」

「駄目だな」

「ああ、難しいな」

そのバッターも見ての言葉だ。

「あいつを抑えるにはどうしたらいい？」

「ストレート、カーブ、スライダー」

彼の持ち球だ。

「全部見られてるよな」

「他に変化球ないのか？」

「確か」

返答は弱いものだった。

「なかつたな」

「じゃあ。やっぱり」

「打たれるのか？」

出るべきではない言葉が出た。

「ここは」

「それかフォアボール」

「満塁か」

これはこれで絶望的な事態であつた。一打出ればまさに終わりという状況がさらに深刻なものになってしまふからだ。満塁はただ満塁であるだけではない。

「ピッチャーにとつては満塁は辛いからな」

「心理的にな」

塁が空いているかいらないか、この違いはかなりのものだ。

「だったらやっぱり」

「ここは」

「打たれたら駄目だ」

このことがまた言われる。

「けれどな。ここはやっぱり」

「辛いよな」

「何かいい手はないのか？」

そう言っている間に一三はまた投げる。ところがこれもボールだった。真ん中高めでこれまた僅かに外してしまった。僅かだがボールはボールだった。

「おい、もう本当に後がないぞ」

「ツースリーか」

「あのストレートでも駄目か」

やはりバッターはバットを出さなかったのだった。憎らしいまでに選球眼がよかった。

「あと一球、ストライクじゃないと」

「けれどストライクを投げたら」

どうなるかは言うまでもなかった。

「打たれるな」

「今度こそな」

この予感確信だった。

「まずな。やばいな」

「ストライク投げないといけないしな」

ボールを振らせられるのならばとうの昔にできてきたことだった。

「本当にどうしたらいいんだ？」

「振ってくれないぞ」

皆こう言って顔を曇らせる。

「何が何でも振ってくれないとな」

「駄目なのに」

「けれどな」

しかしここで一人がそのマウンドの二三の顔を見た。

「近藤の奴」

「どうした？」

「落ち着いてるな」

その顔を見て言うのだった。

「この状況でも随分な」

「ああ、そういえばそうだな」

「確かな」

見れば確かにそうだった。彼は落ち着いていた。

「落ち着いているってことは」

「安心していいのか？」

「まあ俺達にはどうしようもできないしな」

これが残酷な現実だった。

「できるのはあいっただけだし」

「やっぱり見守るしかできないんだな」

「そうだな」

結局のところこうなのだった。これしかなかった。

「じゃあ。最後の一球」

「見守るか」

彼等も遂に腹を括った。

「抑えても打たれても恨みっこなし」

「それでいくか」

「ああ、俺は決めた」

「私もよ」

当然ここには女子生徒もいた。彼女達も腹を括ることにしたのだ。
った。

「もうね。こうなったら」

「近藤君に命預けるわよ」

「甲子園」

そう、甲子園は彼の左腕にかかっていたのだった。

「頼んだからね」

「本当にね」

こうした言葉を背負う形となって彼は遂に最後のボールを投げた。
それは内角に入るものだった。高めで球威も速度もそれ程ではない。

「スライダー!?!」

「いや、カーブか?」

それを見た多くの者がそれは変化球だと見抜いた。

「馬鹿な、それ投げても」

「ボールだぞ」

スライダー、カーブならばそれは明らかだった。

「四球を選んだのか?」

「まさか」

それはすぐに疑念で返された。

第九章

「ここで逃げてても何にもならないぞ」

「けれど打たれるよりましなんじゃないか？」

「こうした意見も出された。」

「それよりはな」

「それはそうだけれどな」

「これは確かに一理あった。」

「けれどな。ここで四球を出したら」

「満塁か」

「ピンチを先送りしただけだ」

「そうでしかないのも明らかだった。」

「それは何にもならない」

「確かにな」

「それはな」

「皆このこともわかっていた。」

「けれど。ここで四球も」

「仕方ないか」

「あのバッターには打たれている」

「まずこの前提があった。」

「それで今勝負に出ても」

「打たれるだけか」

「だからな」

「こう話されるのだった。」

「ここで四球にしても」

「仕方ないか」

「しかし妙だな」

「だがこんな言葉も出て来た。」

「妙!？」

「四球ならわざと外さないか？」

こう言われるのだった。

「それなら。変化球なんか投げずに」

「んっ！？そういえば」

「確かに」

皆その言葉に気付いた。

「そうだよな。ここで変化球なんて」

「投げないな」

考えてみればその通りだった。

「下手に体力使うよりな」

「軽くストレートでな」

「どうということなんだ？」

やはり考えてみれば妙であつた。

「ここで変化球なんて」

「何かあるのか？」

「あのボールに」

「確かに球威はない」

これは見ればすぐにわかることだった。

「それにスピードも」

「間違いなく変化球のものだな」

「ああ」

これもまた見ればわかることだった。

「何だ？それなら」

「何か考えがあるのか」

「近藤に」

「若しかしたらな」

また誰かが言った。

「けれどそれが何かは」

「わからないか」

「何のボールだ？」

いぶかしむ声がまた出て来た。

「あのボールは。一体」

「何だ？」

皆ボールを見つついぶかしむ。一瞬の筈が永遠に感じられる中で、そしてその中で投げられた一三の最後のボールは。バッターの手元で変化したのだった。それは。

「なっ！？」

「まさか」

皆そのボールを見て驚きの声をあげた。

そのボールは右から左に、バッターから見て外に逃げるボールだった。つまりは。

「シュート！？」

「間違いない」

そのボールの動きは明らかにシュートだった。スライダーと反対側に曲がるそれだった。

「まさか。あいつあんなボールも」

「持ってたのか」

誰もがこれには驚かされた。

そしてそれはバッターも同じだった。

これは予想しておらず思わず身体が泳いでしまった。こうなっては終わりだった。

バットは空しく空を切りそれで終わりだった。この瞬間に全てが終わった。

「ストライーク、バッターーアウト！」

審判のジャッジがグラウンドに響き渡る。

「ゲームセーアー！ーッ！」

そして試合終了の声も。今それが響き渡ったのだった。

「やった！」

「やったぞ！」

そして歓声もまた。

「勝った！勝ったんだ！」

「甲子園だ！」

グラウンドだけでなく観客席からも声があがる。

「近藤！やったな！」

「やってくれたな！」

マウンドでは一三を囲んで皆が抱き合っている。

「よくあんなところでな！」

「シュートなんて！」

「ずっと狙ってました」

その一三はにこりと笑って皆に述べるのだった。

「何時投げようかって」

「切り札だったんだな」

「はい」

ナインにも答える。

「本当にそのつもりでした」

「そうか。それでか」

「あそこで投げたんだな」

「あれしかありませんでした」

彼はここで真剣な顔になった。

「シュートを投げる場面は」

「そうだな。けれどな」

「それでもな」

だがここでナインは。強張った顔になるのだった。勝利に酔ってはいたが。

「本当に思い切ったよ」

「試合で投げたのはじめてだろ？」

「人前で投げたのはじめてです」

実はそうだったのだ。

第十章

「シユートは」

「はじめて!？」

「あれでか」

「上手くいくかどうか」

その顔が不安なものになった。

「正直不安でした」

「それでも投げたのか」

「ボールは全部読まれていました」

これは今までの、そして今の打席でも明らかだった。

「完全に」

「それはそうだな」

「確かにな」

このことはナインも明らかにわかることだった。何故なら彼等もグラウンドにいたからだ。そして一三と共に闘っていたからである。

「だがそれでも」

「よく投げたな」

「賭けでした」

言いながら大きく息を吐き出した。

「本当に」

「御前が!？」

「賭け!？」

「はい、産まれてはじめてです」
自分でも言うのだった。

「本当に。ですが」

「投げた」

「シユートを」

「何とか上手くいききましたね」

「上手くいったからいいけれどな」

「一步遅れたら」

「はい、それはもう」

ここから先は言うまでもなかった。だがそれでもだった。

「勝ちました」

「ああ、そうだな」

「勝った」

これは間違いなかった。勝った、この現実には確かなものだった。

「御前は勝ったな」

「この勝負に。そして」

「甲子園だ」

これもまた確かなことだった。甲子園に行ける、勝者が掴むことのできる確かなものであった。このこともまた確かなことであった。

「俺達は甲子園だ」

「御前のシュートでな」

「いえ、僕だけじゃないです」

しかし一三は言った。

「失敗しても」

「失敗しても？」

「先輩達がいたから」

彼は言う。

「若し打たれても取ってくれと思ったから」

「投げたのか」

「はい、わかりました」

言葉を続けるのだった。

「野球は一人でやるものじゃないってことが」

「それは言うまでもないだろ？」

「野球は」

「今まで以上にですよ。本当に」

顔を少し俯かせる。俯かせたその顔からはまだ汗が流れている。

その汗がキラキラと輝きマウンドに落ちていく。その汗はナインからも見られていた。

「誰かがいて。ですから」

「投げられるのか」

「この左腕も」

今度は己の左腕を見たのだった。

「一人のものじゃないんですね」

「皆の為のものか」

「俺達の」

「はい、そうです」

ここでも己の左腕を見ている。

「ですから僕はこれからも」

「投げるんだな」

「マウンドで」

「それでいいですよね」

今マウンドに集まっているそのナイン達に向けての言葉であった。

「僕はそれで」

「ああ、それでな」

「いいと思うぞ」

「わかりました」

一二は先輩達の言葉に頷いた。頷きながらその顔をあげるのだった。

「それじゃあこれからも」

「よし、じゃあ行くぞ」

一人が彼に声をかけた。

「甲子園にな」

「いいな」

「はいっ」

他のメンバーも声をかけたここで先程のそれよりも大きく頷いたのだった。

「じゃあそれで僕は」

「なげろるんだ」

「わかりました」

これで彼の投げ方が決まったのだった。この春の選抜もそれからも投げ続け三年の時には春夏連覇の原動力になった。だがそれでも彼はそれに驕らず周りに感謝の心を向け続けていた。そうしてドラフトにおいて。彼はあるマスコミを親会社を受けている球団から一位指名されたのだが。

第十一章

「嫌です」

会見の場ではつきりと言い切ったのだった。

「僕はあの球団には行きません」

「えっ、行かない!？」

「一位指名なのにか」

「はい、行きません」

学生服のまま言い切るのだった。その前には驚く記者達が集まっている。無論そこにはその球団を持っている新聞社の記者も存在している。

「あの球団には」

「いや、しかしだね」

「それは」

記者達は驚きを隠せないまま彼に対して問う。

「折角一位指名なのに」

「即戦力として期待されてるんだよ？」

「あの球団のことはわかっています」

淀みのない言葉であつた。

「ですから僕は行かないのです」

「ですからって」

「意固地にならなくても」

「意固地じゃないです」

淀みのない言葉は変わらない。

「野球は皆でするものですよね」

「!？何を言ってるんだ!？」

「そんなことは」

「あの球団にはそれはないです」

彼はまた言った。その背にかけられているのは今彼がいるその高

校の校旗である。それ以外のものは何もかけられてはいないのだ
た。

「ですから僕は行かないんです」

「それは違う」

その球団を持っている新聞社の記者の言葉だった。

「あのチームは素晴らしいチームだ」

「どうしてですか？」

「まず球界の盟主だよ」

彼は胸を張って言い切ってきた。

「そして何度も優勝したし」

「お金積んでですか？」

だが一三はこの空虚な言葉にこれだけで返した。

「けれど今はあまり優勝していませんよね」

「うっ……」

さらに追い討ちを仕掛けるのだった。

「それに盟主なんて勝手に言ってるだけじゃないですか。テロリス
トだって自分達を正義だって主張しますよ。それと同じじゃないん
ですか？」

「あのチームをテロリストだって言うのかい」

「そこまでは言ってます」

顔を真っ赤にする記者に対して彼はあくまで冷静な顔であった。

「ただ。あのチームはチームプレイがないです」

「うっ……」

「選手を大切にしないですよ」

さらに言うのであった。

「僕はそうしたチームには入りません」

「馬鹿な、折角契約金を億単位で用意しているのに」

なおこの発言は後日この記者の失言、方言として問題になった。
その理由はここからの言葉にあった。彼はさらに言ったのである。
「家族や周りの人にも実弾を用意して」

「もう皆には言ってますから」
その実弾という言葉にも返してきた。

第十二章

「ですから。僕はあのチームには行きません」

「くっ……」

「僕はアメリカに行きます」

「えっ、アメリカに!？」

「嘘だろ!？」

「嘘ではないです」

彼は冷静なまま言葉を続けてきた。

「僕はアメリカに行って大リーグを目指します」

「大リーガーに!？」

「高校を出てすぐに」

「僕を本当の意味で必要としくれるチームに入りたいんです」

これこそが彼の本音であった。

「だからです。日本にあれば日本のそのチームに入ります」

「そうか。そこまで言うのか」

「まだ高校生なのに」

「この左腕を頼りにしてくれているチームや人達の為にです」

「そうして何時までも投げていられると思うな」

ここでまたあのチームの親会社である新聞社の記者が言うのだった。

「世の中何があるかわからないぞ」

「おい、あんた」

「いい加減にしろよ」

今の言葉には流石に周りの同業者達も顔を顰めさせ彼を取り囲んできた。

「つまり彼の左腕を害しようっていうのか？」

「それでもスポーツを知ってる人間か？」

「うっ、それは」

今になってようやく己の失言に気付いた。だがもう遅かった。

「俺は。何も」

「帰れ」

「出て行け」

皆から言われたした。

「もう二度と記事書くな」

「発言は全部報道しておくからな」

「くそつ、覚えていろよ」

最早チンピラの捨て台詞であつた。

「どうせこんなピッチャー大成しないからな」

「わかったからとつと帰るんだな」

「帰り道位開けておいてやる」

記者のうちの一人が顎をしゃくつて出口を指し示した。

「ほら、そこだ」

「とつと行け」

「ふんっ」

この記者は逃げるようにして会見の場を後にした。皆その後姿をこれ以上はない侮蔑した目で見送った。そしてそれが終わってからあらためて一三に顔を向けるのだった。

「じゃあ近藤君」

「君はそうしたチームに行きたいんだね」

「はい、そうです」

晴れ渡った声での返答だった。

「僕はそのチームに行きたいです」

「そうだよな。チームは確かに勝つことが大事だけれど」

「問題はその勝ち方だよな」

「チームの雰囲気だよな」

「だよな」

記者達は顔を見合わせて言い合う。

「近藤君の左腕に相應しいチーム、絶対あるよ」

「君のその心にも相應しいチームがね」

「はい」

一三は明るい声で彼等の言葉に応えた。

「僕は投げます」

そしてまた言ったのだった。

「そうしたチームの為に」

「うん、これからもね」

「そうして投げ続けてくれよ」

「左腕が」

今己の左腕を見るのだった。目の前にその左腕を出して。

「道を開いてくれますから」

「そうだよな。左腕がな」

「切り開いてくれるよな」

「はい。ですから」

さらに明るい声になっている一三だった。

「投げます」

彼は言った。

「これからもずっと」

日本人で最高の左腕と言われ大リーグで三百勝を挙げた近藤一三の高校時代最後のエピソードである。彼はその左腕で全てを切り開き栄光と仲間を手に入れていった。だがそれはただここではじまつたわけではないのだった。こうした熱くしかも確かな青春時代があつてのことであるのであつた。

サウスポー

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5529g/>

サウスポー

2010年10月8日15時30分発行